

『近代日蓮宗年表』の作成にたずさわって

石川教張

(立正女子短大講師)

仏教教団は、こんにちいぜんとして大きな試練に立たされている。信仰教説を時代に活現し、現代社会に生きる人々の苦悩に対していかなる解決を提示しえるのか、濁乱の世間と人間存在の深部を凝視しながら、いったいどのような人生の指針をもたらすことができるのか。こうした命題を問うことは、仏教の今日的あり方と仏教教団の信仰的・社会的役割を見出すための根本的姿勢であろう。

現在、信仰教説を社会に具現する教団のあるべき姿と、社会的存在としての仏教教団の実態との間には、一条の深淵が横たわっており、この「間」をみたく普遍的な教説を提示し、それを時代的に創造活現してゆく教化実践

は、なお未開拓であるといわざるをえない。

とくに伝統仏教教団においては、この「間」の深淵は深まりこそすれ埋めつくされるにいたっていない。伝統仏教教団が、開祖のきり開いた信仰のダイナミズムを風化させてから久しい。あるいは、仏作って魂入れず風の形式主義に流れ、あるいは国家の体制や社会の秩序に従属し順応する事大主義に甘んじて、民衆のための仏教、くらしの中にいきる仏教をめざす信仰実践から離れてきたのが歴史の鏡にうつし出される事実であろう。

歴史とは、三世を知ることである。過去の事実を直視し、そこから教訓と課題をひきだすことなしに、現在の再生も未来への展望を発見できないことはいままでもな

い。とりわけ、近代という「時」は、信仰教説や教団護持と国会社会の体制的秩序のはざまに立たされた仏教教団が、葛藤と動揺と順応と抵抗とをくりひろげた時期である。近代日本の中の仏教を見なおすことは、歴史にいきる仏教教団のありようを論証し探究するうえできわめて重要なテーマとなるであろう。

他の仏教教団と同じく、近代日蓮宗の歩みもこの例外ではありえない。日蓮宗は、近現代社会でいかなる足跡をしるしたのか、その時代的問題状況ときり結びつづどんな対応と葛藤を展開してきたのか——私たちはこうした問題視角から近現代日蓮宗教団史の研究にとりくみ、このたび現代宗教研究所スタッフを中心に『近代日蓮宗年表』を刊行して、こうした研究の礎石の一つ積みあげようと試みたのである。

この『近代日蓮宗年表』は、日蓮聖人第七百遠忌記念出版として日蓮宗宗務院・同遠忌奉行委員会の支援のもとに刊行されたものである。また、「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時を習うべし」と示した日蓮聖人の教えに導かれつつ、立正安国の信仰実践と近代社会との矛盾・対

応を迫られた日蓮宗の動向を基軸にすえ、日蓮宗の信仰・布教・教育・研究・文芸・行政・社会活動の全般を関連づけ客観的に集約したものである。それは、なによりも、近現代の日蓮宗を歴史の鏡にうつし出して、そこに日蓮宗の近現代における姿をとらえ直し、今日的課題を明らかにしようとする点にあり、近代仏教の中の日蓮宗教団史研究の一助としたいという願いにもとづくものであった。

本年表では、この点から、第一に、日蓮聖人略年表、日蓮聖人滅後・近世略年表、明治元々昭和五十四年までの近現代年表を日蓮門下や地域的な動きをも含めて所載した。第二には、諸宗教と近現代の社会動向を簡潔に並記し、諸宗教・社会の動きと日蓮宗とを関連させながらとらえてゆく点を考慮して記載した。第三に、とくに重視したのは、年表項目だけでなく、「近現代日蓮宗年譜」(明治元々昭和五十六年)を掲載し近現代日蓮宗略史としてまとめた点である。この「年譜」を読めば、日蓮宗の近現代における主要な足跡は、一応概観することができると思う。また活用の便を考えて、関係主要文献と索

引をも付した。第四に、なるべく読みやすく、わかりやすく、活用しやすい年表にすることに努めたつもりである。これまで日蓮宗関係の年表は数種刊行されてきたが、いずれも簡略すぎ活用しにくい傾向があり、また今日の動きまでを含めて記載されていない状況にあった。このうち昭和十六年刊の『日蓮宗年表』は最も体系的に編纂された労作であるが、活字が小さいため活用しづらい点が多かったこともあり、本年表では、『日蓮宗年表』の成果に立つて平易で活用しやすいように考えて作成を試みたわけである。

日蓮宗では、近代に関する史料の保存整理状況はきわめて不十分なため散逸したものや入手しにくいものも少なくなく、史料的制約から内容面で充足されない点も多い。しかし、「日蓮宗教報」「日宗新報」「宗報」「日蓮主義」「日蓮宗新聞」等の基本資料を典拠として八百頁余にわたり二万項目余を所載し主要動向を提示しえたと考えられている。

本年表には、近現代における日蓮宗の苦悶と対応と格闘の歴史が刻まれている。天皇を頂点とする「国体」に

順応ないしその開頭を試みた姿や、戦争をはじめとする社会の動向に即応した姿などがうつつし出されている。それらは、過ぎ去った事実ではなく、今日の現実と、これからのあり方を考えるための教訓と課題を内在させているように思われる。いかなる社会状況にあらうとも、信仰教説を貫き通し、民衆のための信仰活動と社会的とりくみを推進させてゆくことの重要さを、本年表は語りかけているとも思えるのである。

今ほど、近現代の仏教史研究が、教団において、あるいは教団の枠をこえて深められ活発に推進されるべき時はない。

本年表は、まだ充分ではないが、日蓮宗教団史ならびに近代仏教史の研究の一助となり、仏教の社会的役割とその再生をめざすという歴史的課題の解決にとりくむための礎石の一つになれば望外の幸いである。

本年表にたいする大方のご教示をお願いするとともに、その充実を通して日蓮宗教団史と近代仏教史研究に努めたいと念願している。

〔仏教タイムス〕 57年5月5日号より転載)